地方特定道路上野大山田線道路改良事業に伴う

# 高座遺跡発掘調査報告

—— 上野市喰代 ——

1 9 9 5 • 3

三重県埋蔵文化財センター

埋蔵文化財は、祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちの責務として、これを積極的に保護し、後世に伝えていくとともに、さらなる文化の向上のための礎とすべきものであります。しかし一方では地域経済の活性化あるいは住民の生活や安全の向上のために、各種の公共事業も必要と考えられます。

こうしたなか、三重県埋蔵文化財センターでは、文化財保護行政の一環として毎年各開発関係部局に事業を照会し、事業予定地内の埋蔵文化財の確認とその保護に努めてまいりましたが、現状保存の困難な部分につきましては、発掘調査を実施し、記録保存を図っているところであります。

ここに報告いたしますのは、地方特定道路上野大山田線道路改良事業に伴い、滅失することなりました高座遺跡の発掘調査を実施いたしましたところの結果であります。この成果が、消滅した遺跡に代わり、郷土の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切に望みます。

また、当センターといたしましても、今後も広く県民のみなさまに埋蔵文化財の重要性について御理解をいただけるよう日々努めていく所存にございますので、何とぞ御支援のほどをお願い申し上げます。

なお、末尾ではございますが、協議から発掘調査に至るまで多大な御理解 と御協力をいただきました県土木部道路建設課並びに上野土木事務所、上野 市教育委員会、区長さんをはじめとした地元自治会の方々には心から感謝い たします。

平成7年3月

三重県埋蔵文化財センター 所 長 川 村 政 敬

### 例言

- 1. 本書は、平成6年度地方特定道路上野大山田線道路改良事業に伴い、発掘調査を実施した 高座遺跡(旧称 曜代古墳)の発掘調査報告書である。
- 2. 高座遺跡は、三重県上野市喰代字高座に所在する。
- 3. 調査は、次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

技師 竹内英昭

研修員 増田 博

- 4. 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第1課および管理指導課が行った。 また、本文の執筆はⅡを増田が、他を竹内が行い、全体の編集は竹内が行った。
- 5. 本書で使用した方位は、全て真北で示している。
- 6. 本書で用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。

SX:墳墓等

7. 調査にあたっては、地元地区をはじめ、上野市教育委員会、大山田村教育委員会および県土木部道路建設課、上野土木事務所からの協力を得た。また、現地作業に際しては、以下の方々に御尽力いただいた。記して感謝の意を表したい。

〔現地調査作業員〕敬称略

(下友生) 西堀善之助・大田孝義・榎新太郎・榎実、(中友生) 冨岡善助、(界外) 堀性司、 (蓮池) 池永平邦、(喰代) 増田勉・安場みさへ・浜美里・川並京子・山崎志津江・磯田美 代子・青森かねよ・青木つや子

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。 各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

## 本 文 目 次

#### I. 調査の契機と経過

(1) 調査の契機	1
(2) 調査の経過	1
Ⅱ. 位置と環境	2
Ⅲ.遺 構	4
Ⅳ. 遺 物	4
V. 結 語	
(1) 遺構・遺物のまとめ	7
(2) 高座古墳群について	7
(3) 喰代地域の古墳群について	7
(4) まとめにかえて	9

## 挿 図 目 次

Fig.	1	遺跡位置図	1	Fig. 5	調査区調査後測量図	6
Fig.	2	遺跡分布図	2	Fig. 6	出土遺物実測図	6
Fig.	3	高座遺跡周辺の古墳分布図	3	Fig. 7	高座 2 号墳墳丘測量図	8
Fig.	4	調査区調査前測量図	5			

## 付 表 目 次

Tab. 1 遺跡分布地名表 ……………… 3

## 図 版 目 次

 PL. 1
 調査区から大山田盆地を望む(南から)
 PL. 3
 出土遺物(外面)

 方形土壇状遺構SX1調査前全景(西から)
 出土遺物(内面)

PL. 2 調査区遠景 (東から) 方形土壇状遺構 S X 1 調査後全景 (西から)

### I. 調査の契機と経過

#### (1) 調査の契機

地方特定道路上野大山田線は、大山田村と上野市 喰代地区を経て、友生地区から上野市街地を結ぶ主 要道路であるが、一部道幅が狭く、対向に難航する 区間が存在していた。このため、交通緩和と地域振 興のためにも、よりスムーズな交通路の整備が必要 とされてきた。

事業地内に遺跡の存在は周知されていなかったが、 付近には古墳群の存在が認められていることや、事 前の分布調査で盛土らしい高まりを発見し、遺跡の 存在が明らかとなった。

事業はすでに調査地に隣接する地点まで及んできており、調査地の所在する舌状に張り出た丘陵を避けることは困難な状況と判断され、発掘調査を実施し、記録保存することとした。

#### (2) 調査の経過

調査地は、舌状に延びる丘陵の末端近くに位置し、

標高約230mで、付近の水田面との高低差は、7~ 8mほどになる。

丘陵の末端には巨石が露頭し、急崖となって低地 部と画される。この巨石箇所には、調査直前まで 「山之神」が祀られていた。

調査前の段階では、やや平坦な丘陵尾根上に、低 平ながらも墳丘状の高まりが認められ、平板測量を 実施したところ、等高線の状況から方形墳の可能性 が考えられた。

このため、墳頂付近と思われる箇所を中心に、4 方向に土層観察用の畦畔を設定し、丘陵尾根部の表 土掘削を手作業により実施し、遺構検出に努めた。

調査区は、調査前には竹林をはじめ、檜などの各種雑木がみられ、その抜根に相当な労力を費やした。 調査は、平成6年5月11日に開始し、6月10日に終了した。調査期間は、約1ヶ月に及び、調査面積は、約150㎡ほどであった。

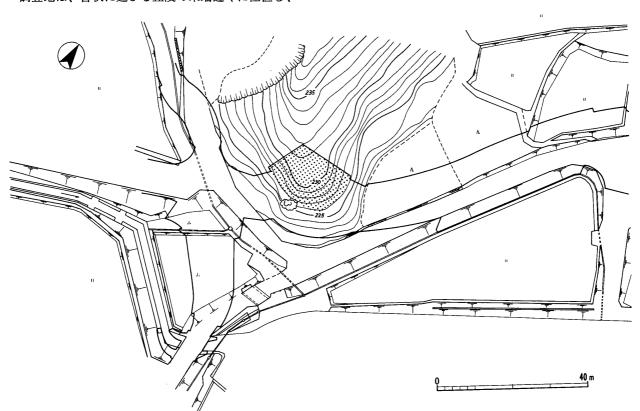


Fig. 1 遺跡位置図(1:1,000) [アミ部調査区]

### Ⅱ. 位置と環境

上野市街地より東へ約8km、友生地区の奥まった標高250m前後の山麓部に喰代の集落がある。

喰代は、木津川の支流久米川と服部川の支流中野川の分水嶺の位置にあり、三方を山に囲まれてはいるが、西に向かっては久米川、北に向かっては中野川によって狭い谷がつくられている。久米川は、友生地区、久米地区を流れて木津川に流れ込んでおり、中野川は、大山田村平田地区に流れ、服部川に合流している。久米川流域には、下流の久米地区に久米山古墳群、友生地区内の下友生に円墳7基からなる奥小波田古墳群がある以外は、古墳・奈良時代の遺構はあまり知られていない。

中野川流域には、大山田村との境付近に、東側の 山麓部分に円墳14基、方墳1基からなる高猿古墳群 がある。また、その下流には隣接して円墳10基から なる中出山古墳群があり、さらに西側には、川をは さんで高猿古墳群の向かい側の尾根上あるいは斜面 に高座古墳群がある。また、高座古墳群と同じ中野 川左岸の丘陵上には、円墳8基からなる出屋敷古墳 群も所在している。

本遺跡は、高座古墳群が存在する丘陵の末端が、 東の中野川に向かって岬状につき出た崖の上に位置 し、南北に中野川の流域が一望できる非常に見晴ら しの良い場所に位置する。

近在する高猿古墳群では、1号墳、6号墳が発掘 調査されており、1号墳は、径約21m、高さ2.8mの 円墳で、大正年間に盗掘を受け、倭製画文帯神獣鏡、 倭製六獣鏡、珠文鏡、滑石製紡錘車1、銀環2、碧 玉製管玉4、碧玉製勾玉2、硬玉製勾玉1、瑪瑙製 勾玉2、ガラス小玉40、須恵器類などが出土し、

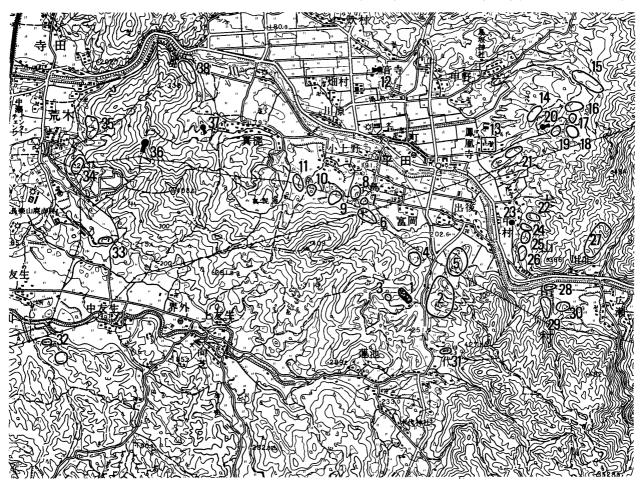


Fig. 2 遺跡分布図(1:50,000)[国土地理院「上野」1:50,000より)

須恵器の中には蛤・鮑・鰈などの貝殻や魚骨が収められているものもあった。6号墳は、一辺18m、高さ2.4m以上の方墳で、幅2mの周溝をもち、葺石をもつものであることが調査の結果判明した。遺物は、倭製四神四獣鏡、銀環、鉄剣、鉄刀、鉄鑿、鉄斧、刀子などが出土しており、木棺直葬の主体部が5基検出されている。

また、奈良時代には大山田盆地内に古代寺院である鳳凰寺が建立され、伊賀四郡の一つ、山田郡の中

心地が鳳凰寺周辺であったことがうかがわれる。

本遺跡は、高座古墳群と同じ尾根上に存在することから、近くの高猿古墳群、出屋敷古墳群、中出山古墳群と高座古墳群を比較してみると、他の3つの古墳群は、主に北側の大山田盆地部への眺望がよく利く。一方、高座古墳群は、どちらかといえば、反対側の南西方向の小さな谷に面している。しかし、本遺跡は、高座古墳群の東端に位置しているため、両方向に視界が開けている。 (増田 博)

1	高座古墳群	9	神林古墳群	17	山口古墳群	25	西浦古墳群	33	旗ヶ峰古墳群
2	高猿古墳群	10	墓の谷古墳群	18	中連古墳群	26	日本田古墳群	34	ダラ古墳群
3	高座B古墳群	11	平林古墳群	19	生賀古墳群	27	山の神古墳群	35	寺山古墳群
4	出屋敷古墳群	12	寺音寺古墳	20	鳴塚古墳	28	横枕古墳群	36	荒木車塚古墳
5	中出山古墳群	13	鳳凰寺跡	21	岡の前古墳群	29	清水谷古墳群	37	寺垣内古墳
6	向山古墳群	14	鳳凰寺古墳群	22	柿ヶ広古墳群	30	丸山古墳群	38	中ノ瀬古墳群
7	野台古墳群	15	甲野古墳群	23	辻堂古墳	31	中切古墳群	39	数字はFig. 2の
8	下中島古墳群	16	陣原古墳群	24	石谷古墳群	32	奥小波田古墳群	40	番号に対応

Tab. 1 遺跡分布地名表

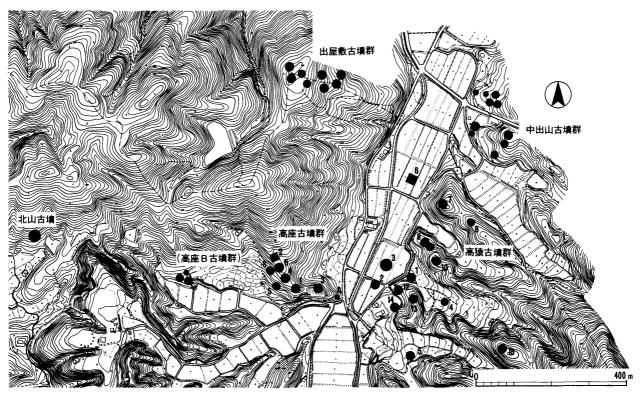


Fig. 3 高座遺跡周辺の古墳分布図(1:10,000) [Aは高座遺跡、数字は古墳番号を表す; L野教育委員会編 ]

### Ⅲ. 遺 構

調査の結果、当初方形墳と思われたものは、地山 整形と一部盛土による方形土壇状遺構SX1である ことが判明した。

調査区全体に竹林および木の根により改変を受けていたが、SX1は、その西側と北側部分では比較的明瞭に方形に整形されているのが確認された。しかし、東側と南側については丘陵の自然地形との区別は容易ではなく、平野部からSX1みた場合、視覚的には北側からの眺望を意識したものと考えられる。

土壇裾部を中心に拳大~人頭大以上の角礫が認め られ、あるいは外護列石的な性格の施設とも当初考 えたが、これらのうちいくつかは、地山から露頭し たものであり、付近の地山中にも多くの岩石が含ま れていることから、自然石あるいはその露頭である と判断し、遺跡に関連するものであるという判断に まで至らなかった。

SX1自体は、現状ではわずかな盛土と地山の整形からなると思われ、盛土が流出したとしても、規模から考えて、さほどの土量があったとは考えにくい。表土下は、暗黄灰色砂質土の盛土と基盤岩あるいはその風化土層の地山からなり、木の根の影響により土層のしまりに若干の強弱が認められる。土壇裾部で南北辺4.8m、東西辺5.4mをはかり、高さはすぐ西側の丘陵尾根部との高低差で0.5mほどである。

埋葬施設等の検出を試みたが、結果として認める ことができなかったものの、土壇頂部やや南側と北 西裾部付近で須恵器片が出土した。

### Ⅳ. 遺

遺物は、須恵器壺(1)・直口壺(2)・脚台片(3)、並びに土師器の小片で、(1)がSX1の北西裾部、(2)および(3)が頂部近くで出土した。

須恵器壺(1) 底部および体部の各一部が出土したが、口頸部を欠く。底部の外側近くに断面台形で、内端面で接地するやや外側にふんばった高台を貼り付ける。体部は倒卵形となり、頸部との接合は三段構成になることが確認でき、口頸部は欠失するが、細長く直上にのびるものであったと思われる。

胎土は白色粒を含み、焼成は良好、黒色のタール 状の噴出物が若干認められる。色調は灰色(N-6/0) を呈する。

須恵器直口壺(2) 肩部から頸部にかけての破片で、 頸部が直上に立ち上がり、体部は球形に広がるのが わかる。体部外面は、器壁の風化により不明瞭だが 平行タタキ痕が認められ、体部内面は同心円状の当 て具痕が残る。

#### 物

胎土は精良で、焼成も良好、暗青灰色 (5PB-4/1) の色調を呈する。

須恵器脚台(3) 器種不明の脚台部の小片で、裾部が大きく八の字状に開くと思われる。外面に二条の段状の屈曲が認められ、比較的細かな波状文が施されている。

焼成・色調などの特徴が、(2)と良く似ており、出土 地点も同じことから、同一個体の可能性もある。

(1)はその形状や三段構成による接合技法から、奈良時代のものと思われ、平城宮で壺 L と呼ばれているものに相当するとみられる。

(2)および(3)は、同一個体とみなすか否かの問題があるが、仮に脚台付直口壺とみた場合、通常古墳時代の所産とみることができよう。内面の当て具痕にわずかにスリケシ調整が認められることから、時期的にも5世紀末葉頃に遡る可能性がある。

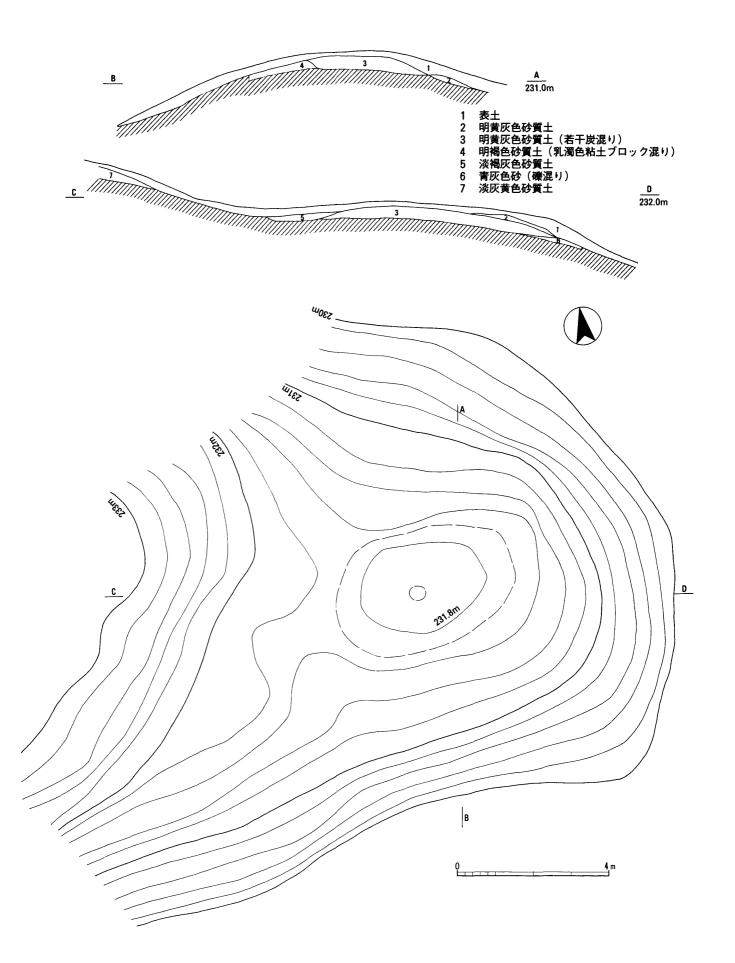


Fig. 4 調査区調査前測量図(1:100)

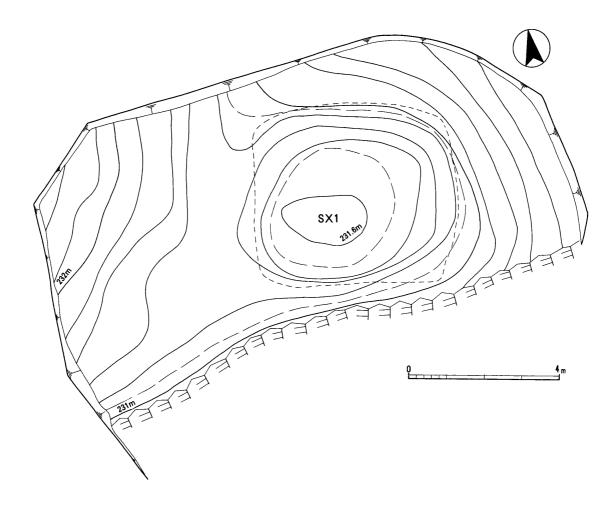


Fig. 5 調査区調査後測量図(1:100)

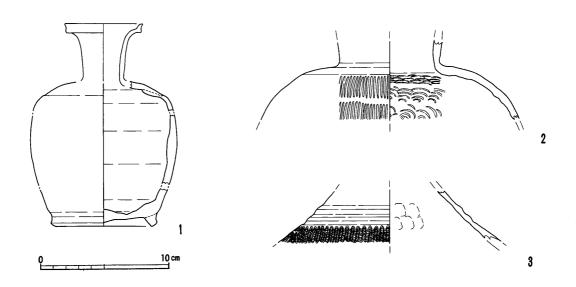


Fig. 6 出土遺物実測図(1:3)

### V. 結 語

#### (1) 遺構・遺物のまとめ

今回の調査で検出された方形土壇状遺構SX1は、一辺4.8~5.4mとあまりにも小規模である点や埋葬施設などが確認されなかったことなどから、当初推定していた古墳とする積極的な根拠は得られなかった。

しかし盛土を伴い、明らかに方形に整形されている点や、頂部付近などにわずかながらも遺物の出土をみたことは、とりもなおさずSX1が墳墓等の可能性も含めて、なんらかの遺構であることに疑念の余地はなかろう。

また、付近が伊賀地域でも屈指の古墳群地帯であることも、見過ごすことはできない。

ただ、出土した土器は古墳時代と推定されるものと奈良時代に比定できるものの二者がある。しかし、どちらも量的に少なく、遺構の性格にも関連するのでいずれの時期に属するかも断定し難いが、周辺に何ら他の遺構が存在せず、古墳時代の土器が墳頂付近で出土したことから考えると、あえていえば、SX1は古墳時代後期初頭頃の築造と考える方がより蓋然性は高いと思われる。

#### (2) 高座古墳群について

高座遺跡の所在する丘陵には、これまで高座古墳群として8基の古墳が知られてきた。尾根上に1~4号墳、6・7号墳の6基、丘陵斜面に5号墳と8号墳の2基があり、いずれも円墳とされてきている。また、丘陵斜面の2基には石室石材が露出しており、横穴式石室を埋葬施設とすることは明白であるのに対し、尾根上の古墳は、いずれも石室の存在がうかがわれるような石材の露出はみられず、木棺直葬などの埋葬施設が考えられる。

尾根上に立地する古墳は、径15~20m級の規模であるのに対し、丘陵斜面のものは、径10m未満の規模と、相対的に尾根上のものが大きい。

このうち、最高所に位置する 2 号墳について、現 地で実見したところ、墳形等の点について従来の見 解に疑問が生じたため、樹木等で条件的には劣悪な 状態であったが、墳形・規模の調査を目的として、 平板測量を実施した。(Fig.7)

これにより、2号墳は墳丘裾線からすると、むしろ墳形は方墳であり、規模も一辺20mほどとみるのが妥当であることが判明した。古墳は、丘陵の尾根の傾斜変換点に位置し、尾根の上部側を切断して築造している。

墳丘裾に対し、墳頂面は平坦で広い。表面的には 葺石・埴輪等の外表施設は見当たらない。墳頂中央 に陥没箇所があり、盗掘坑とみられる。

立地の違いこそあれ、後述する高猿 6 号墳と墳形 等において類似点があり、築造時期の参考となろう。

高座古墳群は、これまでに発掘調査はもちろん、 出土遺物の伝承もなく、築造時期の想定は現状では 困難であるが、横穴式石室墳が存在する一方で、木 棺直葬等を埋葬施設にするとみられる尾根上の古墳 は、横穴式石室導入以前の古墳と考えられることか ら、当地域における横穴式石室の導入期を前後する 古墳群であったと考えられる。

なお、当地域周辺における導入期の横穴式石室墳としては、大山田村鳳凰寺の鳴塚古墳や同村平田の野台3号墳あるいは、下中島2号墳などがあげられる。これらの古墳は、6世紀前半の築造であることから、高座古墳群の造営期間を考える上での参考となろう。しかし、ほぼ同時期頃の築造とみられる高猿1号墳は、木棺直葬と考えられることから、喰代地域での横穴式石室の導入は、前述の地域よりやや遅れる可能性もある。

#### (3) 喰代地域の古墳群について

高座古墳群の所在する喰代地域には、他に中出山 古墳群、高猿古墳群、出屋敷古墳群などが知られて いる。中出山古墳群と高猿古墳群は、高座古墳群と は中野川を挟んで対岸に位置し、出屋敷古墳群は、 高座古墳群と同一の丘陵にあるが、まったく別の嶺 に立地し、両古墳群は明らかに独立した存在である。 また、高座古墳群の西方、南に張り出す緩斜面に

また、高座古墳群の西方、南に張り出す緩斜面に新たに古墳群が存在することがわかった。仮称とし

て高座B古墳群としておくが、うち1基は横穴式石 室墳とみられ、おそらく3基ほどの円墳が存在する のではないかと思われる。

多くの古墳は尾根頂部や、丘陵斜面に立地するのに対し、高猿古墳群のみは2・3・6号墳など、平野部に立地するものが存在する。

高猿6号墳は、発掘調査の結果、5世紀中葉頃の 築造で、木棺直葬の埋葬施設を5基もつ一辺18mの 方墳であることが判明した。第1主体部からは、倭 製の四神四獣鏡のほか、剣・刀・鉾・斧・鑿・蕨手 刀子などの比較的豊富な鉄製品が出土している。

また、大正年間に盗掘を受けた高猿1号墳は、径21mほどの円墳であるが、出土品として6世紀初頭頃の須恵器をはじめ、倭製画文帯神獣鏡、珠文鏡などの鏡が3面や鉄剣・玉類・紡錘車・銀環などが保管されているほか、鏡については、他に方格規矩鏡や内行花文鏡など計5面が出土したともいわれている。。

当地域の古墳群は、明確に前方後円墳こそ含まないものの、径20mクラスの古墳が少なからずみられ

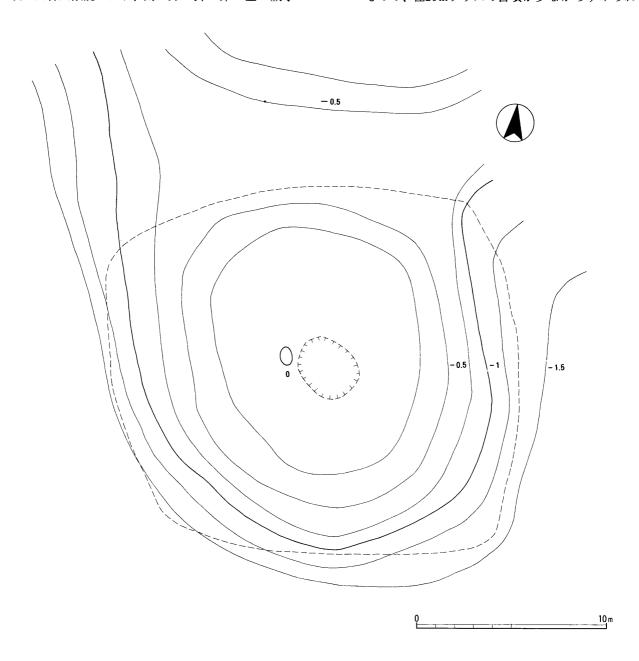


Fig. 7 高座 2 号墳墳丘測量図 (1:200)

るのは特筆すべきことである。

これらの古墳群の造営主体として、相当な大規模 集落の存在が予想されるが、各古墳群は大山田盆地 に通じる狭隘な低地部に面する位置にあり、北部に 広がる大山田盆地部に比べると、古墳群の位置から 求めうる生産地基盤はきわめて狭いという印象は拭 えない。さらに高猿2・3号および6号墳の3基は その低地部に位置しており、可耕地をさらに狭めて いるかのようである。

一方、注目すべきことは、この狭隘な谷部を抜けた以南では、より広い低地が広がっているにもかかわらず、古墳の分布が現状ではきわめて散漫といわざるを得ないことである。すでに消滅したものや未発見のものの存在を考慮しても、分布の稀少さは否めない。すなわち、わざわざ平野部の狭くなる地点を選んで古墳群が占地するという傾向がうかがわれる。

出土遺物からみた当地域の特色として、鏡と鉄製品があげられる。

高猿古墳群では少なくとも計4面の銅鏡が出土しているが、伊賀地域は古墳時代に限れば、鏡の出土時期は前期に遡るものは少なく、出土が知られている50面ほどの鏡のうち、その70~80%が5世紀中葉以降と考えられる倭製の小型鏡である。大山田盆地内では他に鳴塚古墳から乳文鏡が出土しており、5C~6C前半にかけての当地域の古墳から今後出土例が増加する可能性が大きい。

他に出土遺物で特徴的なものの一つは、高猿 6 号 墳出土のほぞ孔鉄斧の存在である。

ほぞ孔鉄斧は、袋状鉄斧と違い、直接鉄斧にほぞ 孔を作り付けることによって、柄と連結するもので、 この種の鉄斧は国内では、京都市殻塚古墳、奈良県 五条市塚山古墳、石川県須曽蝦夷穴古墳雌穴石室、 島根県郡山古墳など少数例があげられるが、むしろ 朝鮮半島南部を中心とした出土が知られており、国 内例の寡少性からすると、彼地との繋がりを強く示 す遺物である<sup>®</sup>。

こうした5世紀代の当地域の中小規模の古墳にみられる鏡の出土数の増加や、特殊な鉄斧をはじめとする多種多様な鉄器の出土は、これらの入手を可能とした集団が前期以来の首長層とは別系譜か、ある

いはその統制下から脱した存在であったことを示しているのかもしれない。

#### (4) まとめにかえて

前節で述べたことについては、当地域が交通路上の要地であることと関連させて理解するのが妥当であると思われる。

すなわち、当地域は南から大山田盆地へ進入する 経路となるばかりではなく、巨視的にみると、大和 東南部から東国へ陸路で向かう場合の重要なルート 上に位置すると考えられる。要するに、大和東南部 から名張・阿保を経たのち、木津川氾濫原を避け、 なおかつ最短距離で伊賀地域を柘植方面へ通過する 陸上ルートとしても想定できるのである。

現在上野市に所属する喰代地域は、かつては伊賀四郡のうち山田郡に属しており、当地域に蟠居していたと考えられる氏族として、「日本霊異記」にみられる「山田郡職代里人」「高橋連東人」の名から、高橋連氏の存在がしばしばあげられる。しかし高橋氏は連姓ではなく、阿拝郡に蟠居した阿閇氏の同族とされ、膳臣氏の後身であり、食膳の調達を任とした高橋臣氏が正しいのではないかともいわれている。

高橋氏の姓の如何はともかくとしても、山田郡の 氏族が、阿拝郡の氏族と同祖であるという考えは、 両郡の古代寺院の瓦当文様が同系譜と考えられるこ とから、興味ある見解である。

今後多角的な視点から、伊賀地域の古墳の性格や 氏族の関係、当時の交通路の問題などを機会を改め て論じていきたい。

#### 参考文献

- ① 中村浩『古墳時代須恵器の編年的研究』 柏書房 1993
- ② 吉村利男「上野市喰代 高猿 6 号墳」 『昭和55年度県営 圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981
- ③ 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 「新版標準土 色帖」 1987
- ④ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「阿山郡大山田村鳴塚古墳および多気郡明和町坂本第1号墳について一三重県主要古墳基本調査8-」『ふびと』30 三重大学教育学部歴史研究会 1969
- ⑤ 昭和63年度大山田村教育委員会により発掘調査
- ⑥ 昭和61年度三重大学により発掘調査

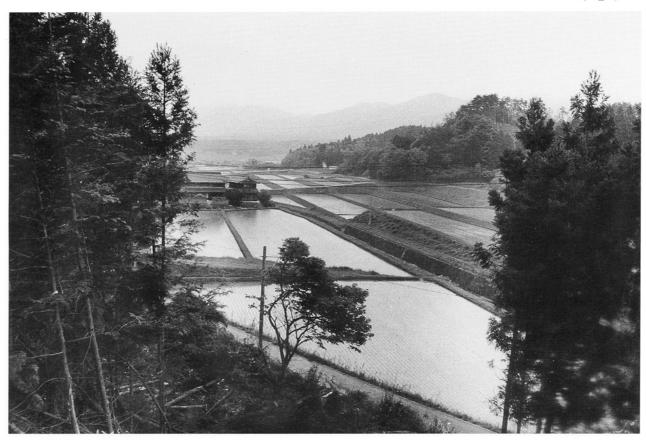
- ⑦ 前掲②
- ⑧ 前掲①
- ⑨ 第10回埋蔵文化財展図録『三重の古鏡』 三重県埋蔵 文化財センター編 1990
- ⑩ 冨田和気夫「蝦夷穴古墳の発掘調査」『蝦夷穴古墳国際 シンポジウム 古代能登と東アジア』 蝦夷穴古墳国際シ ンポジウム実行委員会 1992
- ① 大山田村史編纂委員会編『大山田村史 上巻』 大山田村 1982

『三重県の地名』 平凡社 1983

② 山本雅靖 「鳳凰寺遺跡発掘調査報告書」 大山田村 教育委員会 1988

竹内英昭・野口美幸「伊勢・伊賀」『古代仏教東へ-寺 と窯-』 東海埋蔵文化財研究会岐阜大会資料 1992

# 図 版



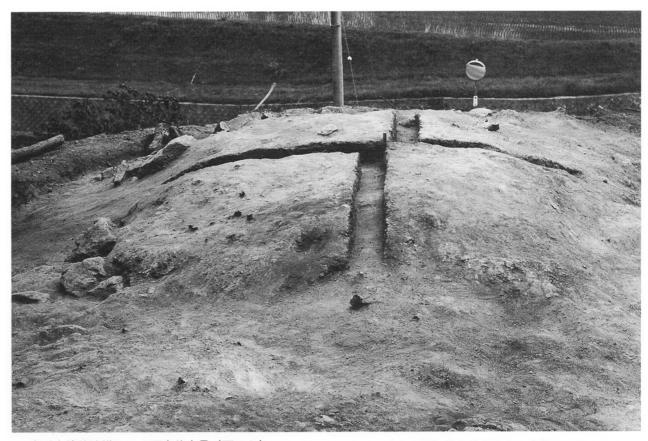
調査区から大山田盆地を望む(南から)



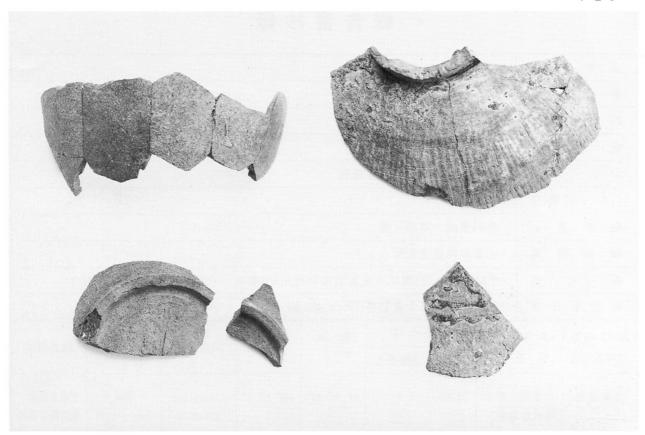
方形土壇状遺構SX1調査前全景(西から)



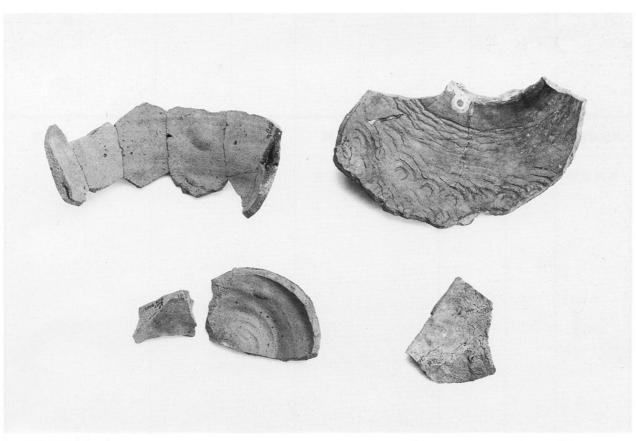
調査区遠景(東から)



方形土壇状遺構SX1調査後全景(西から)



出土遺物(外面)



出土遺物 (内面)

### 報告書抄録

ふりな	が な	コウサ	デ イ 	セキ							
書	名	高層	遺	跡							
副書	名										
巻	次										
シリー	リーズ名 三重県埋蔵文化財調査報告										
シリーズ	リーズ番号 131										
編著者	省 名	竹内英	昭・	増田 博							
編集	幾関	三重県	埋蔵	文化財セン	ター						
所 在	地	₹515-	- 03	三重県多気	<b></b> 我明和町位	<b></b> 方川503番 地	TEL 059	65 - 2 - 173	2		
発行年	月日	西曆	1995	年 3 月 31日							
ふりがな	ふり	がな コード		北緯	東 経	部分和中	調査面積	细术反应			
所収遺跡名	所 在	地市	町村	遺跡番号 。, "		0 / //	調査期間	m²	調査原因		
5.9 座 遺 跡	タミル 三重県 ほおはなり 喰代学		1206	_	34° 44′ 47″	136° 13′ 8″	19940511~ 19940610	150	平成6年度 地方特定道路 上野大山田線 道路改良事前 に伴う事前調 査		
所収遺跡名	種別	主な時代	à	主な	遺 構	主な	遺跡	特記	事 項		
高座遺跡	その他	古奈		方形土壇状:	遺構1基	須恵器	壶 2				

平成 7(1995) 年 3 月に刊行されたものをもとに 平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 131 地方特定道路上野大山田線道路改良事業に伴う 高 座 遺 跡 発 掘 調 査 報 告 1995. 3 (平成7年) 3月

編集 発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社